

201
5
135

館書圖京東			
冊	號	架	函
類	門		

嵐山故郷錦
卷



復讐言故卿錦卷二

軍藤太が奸智ハ 身以亡と媒とあり 話

第三



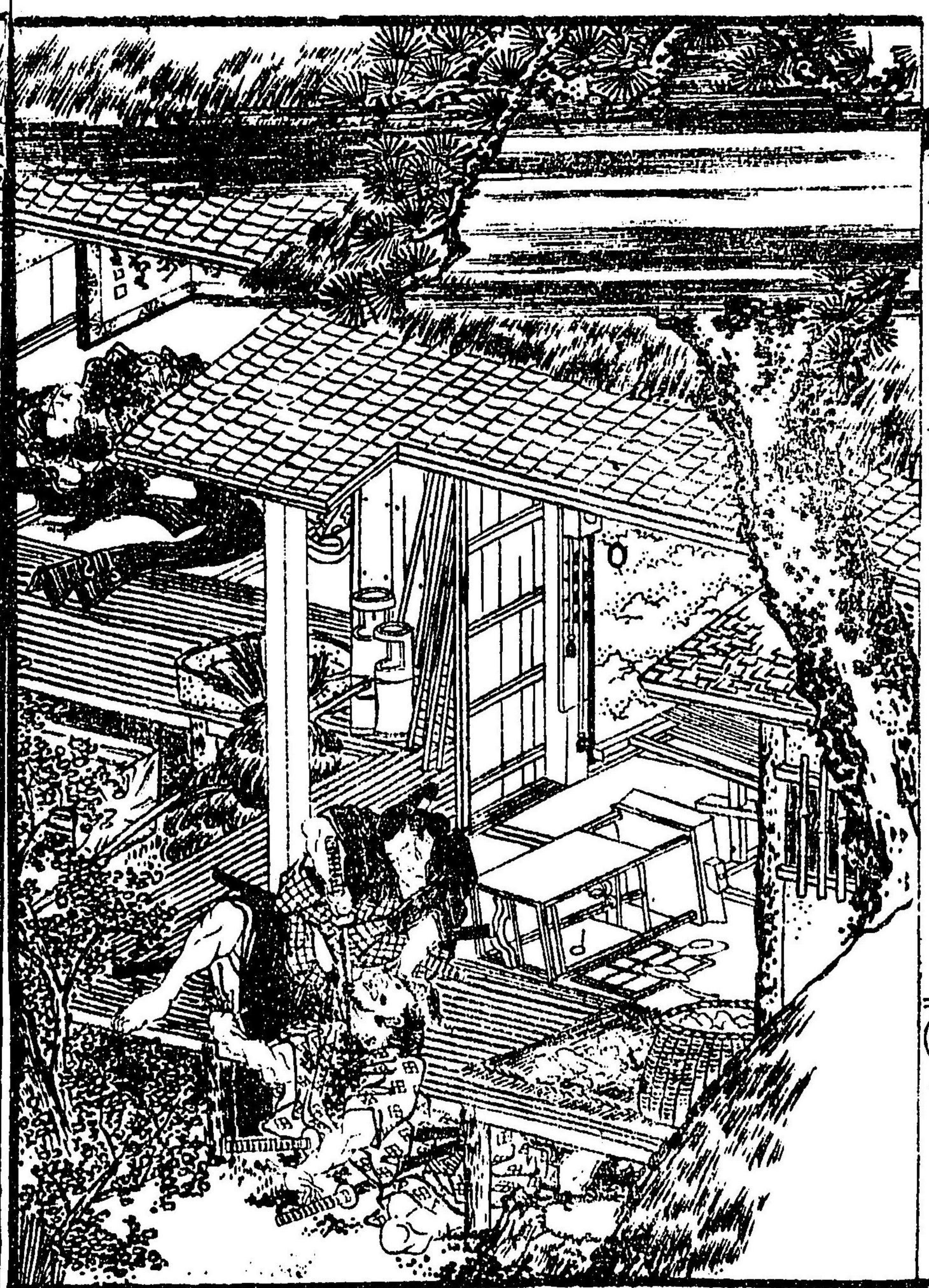
復讐言故卿錦卷二 軍藤太が奸智ハ 身以亡と媒とあり 話 復讐言故卿錦卷二 軍藤太が奸智ハ 身以亡と媒とあり 話

復讐言故卿錦卷二



所次得たるのやせふと付入く。再び肉めく。元常の太刀風吹向る。まゝが治郎大夫の終よ何(う)く討とるりかの癖者立何(う)り。再び刀の鮮血拭ひ。四方の見巡し。うち踏しを延。々る。これい別人よあふ。山三郎義夏が外戚西方三郎在。門輝政が子息同苗左衛門輝景あり。語分兩節。爰に邑五治良。大夫が家より。陣家の秋衣長子源太郎。弟朝二郎のかけ。とく露志下。父忠房が都より。の帰る。程あり。とく。黄昏の頃より。足洗ひも。湯が必し。茶炊も。ゆき。嫌む。あつり。とく。百折小公。法に待たれ。と。初更の鐘も。や。も。た。く。表。取。鐘。の。數。人。と。も。さ。ら。に。帰。る。未。さ。ね。む。妻。乃。校。衣。ハ。い。と。く。膝。煩。ひ。く。兄弟の子息に向ひ。い。様。と。が。父。の。

何(う)か。帰。り。ぬ。ま。や。日。頃。都。に。出。る。人。と。も。か。く。返。還。と。こ。と。い。ふ。じ。此。頃。中。物。息。け。と。若。不。慮。の。更。り。や。あ。ら。ん。と。や。夜。半。の。頃。も。近。付。侍。ら。何。と。も。い。ふ。は。い。い。ふ。ま。で。兄弟も。共。も。と。れ。分。際。居。る。ま。と。も。母。小。齋。刀。が。つ。あ。ん。と。て。何。条。も。更。の。何。と。も。い。ふ。武。術。の。聞。ゆ。る。又。君。さ。う。や。が。て。帰。らせ。ぬ。い。ぬ。ん。然。し。も。母。情。の。ゆ。ゆ。安。ん。其。為。に。我。々。兄弟。迎。ひ。参。り。伴。ひ。帰。り。せん。は。と。皆。取。侍。せ。ぬ。と。も。兄弟。一。度。に。出。る。が。この。世。の。別。も。と。の。後。も。が。思。ひ。あ。ん。と。も。然。る。原。太。郎。朝。二。郎。に。び。の。ひ。て。り。や。如。是。兄弟。一。道。に。り。と。ん。詮。る。と。事。ぬ。り。表。の。世。の。道。より。ゆ。ゆ。ん。下。の。彼。處。より。尋。ぬ。と。兄弟。兩。道。な。り。と。出。ゆ。ま。な。爰。に。又。機。門。平。馬。



夜かろくひひとやめはし泉下に赴く三途川が諸共に手
 に手かとりて渡らんといふ父も母も知らず玉に人生二期五
 十年かろくひひ夢や幼く常には思ひ居かたもあらず
 墓身の上やとて父母の尸骸にまかり付たりと泣く兄弟が
 公のうらみとひやばばとて東天をくも夜へのくくと
 明もろくは法輪の鐘も幽り枕の下に墜る。縁がらぬ群
 鳥のかかりしと鳴くこと更に憐れ催しぬ陽精をやく
 山未だに「登りては兄弟も眼かゆは差は日影に奥にや
 家に傳つる火術の秘密は秘置する箱にけし私書は春
 失くさば又のや驚く兄弟の只をばくばくに歎息」母は
 せし盗賊の棄ひしものもさめし其懐中にめど」とく

子もろく死骸がうらみくく教回りのくもさめし更なる
 ありのろくもべ熟々と思惟くく入の業にあらず又二通の
 賊もろくはぼい父が深手鳴海が深手黒く事のも多右
 うも只手がかりの彼一卷が所持するものどが「出」か
 父母の仇あはれ去はくといふ者者の為業もやく兄弟思
 惟にくもろく源太郎朝二郎に向ひりやう父と鳴海と
 同所不死せりかの一卷が望むと羊皮「正しく鳴海が賊か
 語合がの一卷が棄くくも身か父の帰か待受討果ん
 けし仕損せ」か友も父の深手のやうにといひ鳴海が
 骸の兩段とるり居たり。余人の多くも斯うくや公の
 古又の多くもとて兎角「煩ひ」がわけていへる

ありよび先父母の死骸疾葬せしまつせんとて、兄弟をば
 棺にいらん蓋打釘の指より先我六根成つてゆくは、蓋の
 落るるまゝの雨の音らも「父母のともふ老曾の森らうそ
 けへどく尚か敷敷さひせりもあつてと涙多うう
 鳴り並そ法堂寺に送りけり。七日の吊ひも生るに事
 ごとくより雨風とくも厭ひうく墓所に去りては兄弟共
 よもそ成後へ百度千度敷てしかつらぬ又とへ入へとも
 朝夕に家尊母愛憐深くは「世」恵成るる返は
 くと此身成過と我々の何とらあさん」と諸共よぶるの
 隙も位づり空打詠漢土の蒼梧の雲も余所あらず
 と歎くぬ日とせんやありけり

第四

阿猪野の旅人の籠
 古主に値れ媒とく

話

雲とるの雨とれるをうまのの牧止をぐとく死と散ゆと
 とゆる金谷の春行末もは「陰精火精の道は関守のけと
 往変りるは夢幻のごとくにとね備も邑丘兄弟ハ父母の
 中陰七七四十九日の吊ひも今日の一日にうてあ日公乃
 限も供養成るると佛具成調形もあも外面の方
 一人の素門とる一鉢成をくるもせ兄弟のり候とて
 折よりと聖のくら素子せりのる請入をまのせ
 一遍の田向あもらけり。公つらの神成と進せんとて
 門辺しとて先一鉢成報謝と恭しく礼成はらやう

今日ハ吾ノ其言ト人ノ忌日ニ侍入ノ聖ノ一盞ノ御回向也
 又聊ノ祈也進せんと思ひ侍入ガあつても
 御供養成はしめんとしよと来門の
 被々笠成わさくまへ我等が望む所とく
 りつごつ誘引めへ来詣りし中とて頼る家居
 這入りて家廟に詣て先本尊に礼拝御經一卷讀誦て
 先祖代々佛果の爲今日志ざす處の精天劍山院消滅居士
 刀嶽院成運信女出離生死煩證菩提と回向終りて本坐
 小坐しつて兄弟ハ膳成持出くつて進むもせし来門
 色代しては食兄弟にむひりし様とて今回
 向しつては心正しく御身ホガ父母と覺ゆる年



九月廿一日

妹僧

今年の同日。月も日も同じ
 故めて右やん泡沫
 毎常の世の中。尋づてふあつて
 使ふおひ侍も古の様
 成もなるあつて回して兄弟
 成拂ひ。電光石火の急莫要歎
 ハ度鳴きまゐりて。我父の邑丘
 即太主忠房とて父祖より
 成避て。森津の里に住けるが
 夏の申はく。父忠房都み
 帰るも。母も母も者

陰より五六人頭も出る。白痴の蟻門平馬河始と。四月日草薨
 八月日朝平谷傳内四人の薨りの暖我野の住居よりかくく
 終はりのに排徊く。博奕の世に。邑丘兄弟はの
 うふ見知りく。近辺の標の公語合。去る頃の意根は晴
 んと。此山路よ侍伏し。八表より切か。狼藉あり
 盗賊する。人違ひ。あつらん。抜合。切結へ。声に罵りける。入都に。意の意趣。其
 方。覚つらん。生白気。青二丈切殺。出気。芒
 刃乱に。白刃。切合。兄弟。四表に。打合。木精。物凄く。上段下段。一住。何と。透間。朝良
 討太刀。四月日草薨。受腹。袈裟。切。と仰。八月日。原太郎。劍術。達者。忠雄。朔平。太刀。打。衣裏。首。右。手。の。谷。横。地。あ。り。彼。谷。傳。内。か。樹。の。根。に。踏。き。透。の。谷。と。傳。び。墜。生。死。の。曲。の。と。火。の。原。太。郎。が。墜。し。公。の。う。ち。拂。ふ。手。煉。の。太。刀。先。に。平。馬。の。病。の。一。番。に。逃。出。せ。皆。々。四。人。逃。失。朝。二。郎。は。忠。雄。が。落。る。山。彦。の。声。よ。り。外。の。と。

伊集院平兵衛左衛門尉

とて只鹿丸の如くのもたあし声さるるものとて鹿丸や
 梟の声より外はありたり。血氣盛の朝三郎とての聲は
 耳ふもかけも。只原太郎の如くゆゆんと山路分ち標行ぬ
 爰に又原太郎の深谷へ墜び墜し。荊蕀熊笹切木根岩石林
 に身かひししかども。公討する忠雄の遠近と道は求免
 朝三郎の如くは。かども終る巡り逢やと。衛々に一の家ゆと
 使に先さしひの勢折にやうゆ求ぬ。朝末に立出朝三郎に
 環會とのふまはけしんとがの賤家に立よつと一夜の宿は
 ぬく免ならふ。いづを安く来引く。扉は放け。原太郎の頓
 内に入ると人を見らば夫婦の女あり。知る男子は懐と
 居る。男は五十年の過し。色入黒く。堂の傍成

寅頭盧

とりふのふ髻帯。亦其妻と覺し。同業
 せ入る。然るに女は。夫婦の似げも。婦人
 原太郎。熟々と。日毎は。適る。女も。中
 不審は。夜に。三更にも。様のも。引
 せく。一間の内に。右未。短言。去り
 朝三郎の如何。尋る。道は。環も。で
 此處の宿。求。か。鬼角に。夜も
 明る。尋人の。森ら。操り。須史。夜も
 一夜の早。雲の。起。に。身
 立。便。に。隊。取。岩。石。



鈴鹿山ノ悪黨者
 邑五兄弟を
 うん



新左衛門が妻の濱萩を愛にまじめてお付所取も離さず
 召仕へる初天蒼のわがわがんとは何なる者う恐づらん過は
 頃我家にまはる者何りと取所はなせしに必定彼にかよひま
 ん日頃の信する女もまじりて家の扱へ敗るがはしむにようば
 午討めもさるべとさるまじりて免角拳家にとりしははのま
 うりに病氣と替へ身のりともみ遣りし親里へかへさんとて俄
 黒藏が家に文ははしりし度入るく帰るまじりて初天蒼の口管に
 主人の情の深きかよひの涙よとわく今更に六根割とひも道
 理にとそかくて月満取らるりて玉の子稚子の産くもはらに
 まじりて致の中喜むまじりて初天花の月よ花よと慶しと名は田鶴之助
 と名まらせ置るまじりてのまじりて樂とわくぬ這是住まぬか
 らり



うりかぐく品五源太郎八黒藏が屋に居まや三日は海が共
 らに身体味よかづに辛若日々にりやほしうまら。いとゆか苦め
 けよ。爰によつて初天蒼の源太郎が風情の鳥もあはし朝二郎よ
 幣髻とねむりて銀色めまよふ心まよふまや源太郎も其浅うら
 めか喜ぶく此うまゆも安居く。又妻の阿猪野の黒藏にも増
 く公悪うりまことと。火山の崩ハ焚下くゆまふ守。糞土の虫は
 息気成ちる守とかやひびく。黒藏阿猪野の悪成はして更
 には公悪うりまことと。日よほしく其罪積めるとまうてま
 夫婦密に源太郎の殺害。旅用は棄つんと計較とまか
 初天蒼に公置くうひや殺せん明日の夜や害せん。ままくゆと
 くらえたり。本よりわれ白痴もま。初天蒼にいふく隠

よみく鬼女の面がけいと往來の人成まひやほし。多くの金成バ
 棄ひくうらま。或夜月歌えくく。朧夜。鬼の面打被
 往還にりて生蕃芒夷花の陰にませ。ゆまふ旅人のゆり
 へん。喘ぐ声にくまふと叫びひく芒蒼のゆりに髪うり
 頭もゆま。凌兢とゆん。ま。旅人の行李も旅蕃も
 うらま。遠ま。ま。逃失ま。阿猪野のゆり。ゆか。ひ
 落世。旅蕃ゆま。ゆま。集ま。草中ま。ま。ゆま。ゆま。ゆま
 折し。年のゆ。二十が上。ニ。三。越。旅侍士何ゆ
 ゆま。ゆま。ゆま。ゆま。ゆま。ゆま。ゆま。ゆま。ゆま。ゆま
 安達が原の古夏ま。鬼のゆり。ゆま。実否。正ま。や

長又熊テノ氣シトテ書ヨクニ

下

止つて腰の刀は直利とぬき持真向ふにめどし阿猪野を
 目懸飛かきつと叶じと逃行處をか侍士猿背のど
 阿猪野の首筋引と入ら手へ撲地まげはむがびく
 面をかうへとひ腰骨うらうと遠追まがり逃んじして
 け。是え入るに立ちのり。旅人のうら笑ひ借とせか
 とし。まると再び閃めく白刃に阿猪野の恐く遠声し。ゆ
 らせも入るとも合せ声悲しげふ叫ひまをがの旅人衝
 よりと何者もとて斯のうと住来の人成襲し旅籠
 成棄ひく活計とせむぞと立ちのり臆うげも熟々と阿
 猪野のうと。女の鼓の阿猪野のうとや。西方左衛門の
 女見志也しよ。絶く返しと對面うな。今のうとにけ

うりしあひある故めく如是業成はしむるや我も
 汝の家成出く此首彼首に非個と身の使ふとたへ
 切取強盗ハ武士の常あり。志のよ。今の汝がぬまひ
 恥も夏もは。今晋よる人の宿ももけもへ。汝が家に供
 め。いと行てんと五のよ。阿猪野の夢の心地して借
 も。あやふも夏ありと六根も。おろしく申様育ゆけ
 我君よかくれ處。値んとは。あつぬ外の喜ぶなり。い
 急いしく。家成はしと伴まひぬ

201
5
185

復讐言故郷錦 卷二終

復讐言故郷錦 卷二

